

7 関根家所蔵療治十九方について

○西巻 明彦・新藤 恵久

永田徳本の著『療治十九方』は江戸時代より異本が多い書と言われている。関根家所蔵療治十九方は、昭和四八年新藤恵久により八王子関根家から、徳本流の医書『梅花無尺蔵』、『医之弁』、『徳本流奥儀心得』、『救急十九方』などとともに発見されたものである。関根家は、武州多摩郡粟ノ須村に四〇〇年以上続いた家柄で、これらの書物は、磯野公道より関根嘉門に伝えられた。

「関根家医業御改御用留」によれば、一世・長田徳本、二世・青岸亭（磯野源泉）、三世・岸右膳（岑少翁）、四世・磯野弘道、五世・関根嘉門と、徳本流医学の系譜が記されている。横田観風氏の「奥田鳳作の腹診書」によれば、吉益東洞―岑少翁―磯野弘道―奥田鳳作―奥田多門の系譜を

古方派の直系と述べている。しかしながら、横田氏の著書には徳本流医学と言う用語がないことから考えて、関根家文書が長田徳本―磯野源泉―岑少翁―磯野弘道―関根嘉門の系譜を徳本流医学と記述していることは興味深い事実である。

薬方を小松帯刀氏の「医聖永田徳本伝」内の十九方と関根家十九方を比較すると、発陳湯、榮陽湯、救疝飲、理中散、清濟子、青龍散、直行丸、当帰散、芍薬散、容平丸、解毒丸、順気丸、瀉心円、玉丹、禹余糧丸、治瘡丸、磁石丸、疝虫丸、排膿散と薬方名はすべて一致する。次に薬味構成数の比較を行った。以下（ ）内は関根家十九方の薬味構成数である。

発陳湯（九味） 九味、榮陽湯（六味） 九味、解毒丸（六味） 四味、順気丸（六味） 二味、直行丸（六味） 五味、青龍散（九味） 六味、容平丸（八味） 四味、理中丸（七味） 六味、禹余糧丸（八味） 四味、芍薬散（七味） 五味、清濟子（六味） 五味、疝虫丸（八味） 三味、磁石丸（六味） 四味、救疝飲（八味） 五味、当帰散（十二味） 六味、瀉心円（十一味） 四味、玉丹（九味） 五味、排膿散（六味） 四味、治瘡丸（五味） 四

味である。発陳湯、栄陽湯を除き、他の薬方の薬味構成数は関根家十九方が多い。関根家十九方は、このことから古方派よりも後世方派的であり、鉱物系の薬味も多く、実証に用いる薬方と考えられる。

さらに今回薬味構成についても両者を比較し、また、富土川游氏の論文との比較検討も行った。

(日本歯科大学)

8 葛根湯と歯痛について

○¹⁾西卷明彦・²⁾屋代正幸・³⁾小林一日出

葛根湯は、漢方湯液療法において繁用されている処方の一つである。演者らは葛根湯エキス製剤を、急性化膿性歯髄炎の九歳〜七二歳の患者一三五例に「①温水痛がある、②肩こりを有する、③腹証により、大塚の臍上点に圧痛を認める。」という証を目安に投与したところ、一二六例で何らかの疼痛改善が認められた。また、口内炎、歯肉炎、歯周炎、開口障害などにおいても、有効性が認められる治験例を得た。しかしながら、ツムラ医療用漢方製剤の効果効能の記載事項では、「自然発汗がなく、頭痛、発熱、悪寒、肩こり等を伴う比較的体力のあるものの次の諸症…感冒、鼻かぜ、熱性疾患の初期、炎症性疾患（結膜炎、角膜炎、中耳炎、扁桃腺炎、乳腺炎、リンパ腺炎）、肩こり、上半